

チベット史料の年次計算法

山口 瑞鳳

一 吐蕃王国時代の暦法上における年頭

吐蕃時代の暦法上の年頭について述べた漢文史料を見ると、『通典』卷一九〇辺防六の吐蕃の条では

以^テ麥熟^ヲ為^ス歲首^ト

とあり、その他『唐書』吐蕃伝に至るまで同じ主張が繰り返されて⁽¹⁾いる。

『唐書吐蕃伝箋証』⁽²⁾のうちで、王忠氏はこれに注記して「藏曆以三月為一年之始、至今猶然」となしているが、果してそれでよいのであろうか。今日というより、十二世紀頃から近代に至るまでのチベットでは、『時輪經』に基づく曆が用いられて三月十五日が曆の上の年頭であった。然し、《時輪曆》⁽³⁾は理論上一〇二七年から始るので、吐蕃時代の曆と一連のものであるとする保証は何処にもない。

また、「麥熟」とは、この記述に関する限り、現地の「麥熟」とか、ここでは時期が何時であるとか特に限定さ

れてはいないので、漢人一般の理解における「麦秋」を指すものと考えられ、「麦秋」即ち、陰曆四月と見なければならぬ。ところが、『時輪曆』の年頭は陰曆三月、もしくは、Hor zla gsum pa⁽⁴⁾であり、別の云い方をすると、caitra, nag zla, 'dor ster, myos byed, dri zhim ldan, yid subs zla, 'dod dus zla, ming gzugs zla であり、太陽が「白羊宮」lug khyim にある月に相当する。⁽⁵⁾つまり、王忠氏の注記が用を為してゐないことが知られる。

今、唐の曆を見ると、その一月、つまり孟春は太陽曆一月後半から二月前半にかけての Magha に始る場合が殆どである。⁽⁶⁾他方、チベットの曆でいふ Klong rdol bla mai gsung 'bum 『ロンドン・ライオン全書』の Ma の章 (LSB, f. 24a, 北京版、f. 21a) を参照すると、同日月の

Hor zla dang po = mchu zla (magha) = 'du byed (cho 'phrul zla ba)

が dgun zla tha cung' 即ち「季冬」とわれづつ、唐の「孟春」とわれづつなのが知られる。

有名な曆学書 *Rad bkar zhal lung* 『白蓮御教』⁽⁷⁾ の *cho 'phrul zla ba* を「季冬」の朔日からとすとき、孟春の朔日からに当てるべきかを論じ、前者の説、即ち「季冬」の朔日以後とするのが正しいとされている。

その根拠として *'Phags pa byams pa lung bstan pa* 『聖者慈氏授記経』(『北京版目錄』一〇一、大正藏經四五五『弥勒下生成公経]) 中の “cho 'phrul war' i zla ba la” 「神変を wa の月」とある一節をとりあげてゐる。“wa” は “skag” 即ち「柳宿」Asleṣā の大星を指し、“mChu” 即ち Maghā の月と并ぶ mchu zla (magha) 「磨伽月」を構成し、その前半に当るからといふ (PKZ, f. 32a, l. 6—f. 32b, l. 3)。「磨伽月」はほぼ太陽曆

一の月後半と二月前半とから成っている。⁽⁸⁾この月を「季冬」とするのはロンドン・ラマの説と異ならないが、Hor zla 十二月とはするのは、ロンドン・ラマや後代の一般の所説がこの月を Hor zla 一月とするのと異っている。

太陽暦との関わり方も『白蓮御教』では別個に明確に示されている。それによると、一般に閏を置いて調整した直後では“dpyid zla ra ba yar ngo tshes dgu”「孟春九日」に春分(太陽暦三月二十一日)が来るようになる。⁽⁹⁾

これによれば、チムットの孟春と唐の陰暦一月の対応が明瞭になる。『白蓮御教』は、「チムットの訳経中には誤り方を誤ってこれを仲春九日ともしているが、それに迷わされてはならない」と注意を喚起している (*ibid.*)。

メライ・ラマ五世は「ロンドン・ラマもその説に従っているように」*mchu zla* を Hor zla dang po と見做し、*ra* だけ Hor zla gnyis pa としたり、Hor zla buu gnyis pa とみるのを排除しつつ *g* (*rTsis skar nag las brtsum pa'i dri lan*, f. 32b)。¹⁰特に後者については『白蓮御教』が根拠とした『聖者慈氏授記経』の一節を引用している。これは、年頭を冬至のある十一月とする周正の暦と一月とする夏正の暦のうちの、後者に従って Hor zla dang po が定められるとする立場を根拠とするもので、漢土の暦を規準として云っているのである。従って *mchu zla* を Hor zla dang po とするのは中国系の立場を示すものである。

いずれにしても、陰暦二月がチムットの「孟春」になるわけで、漢土の四季とは一か月遅れて季節名がつけられていたのである。従って、「麦熟」のある「麦秋」、⁽¹¹⁾即ち、陰暦四月はチムットでは dpyid zla tha cung 「季春」と呼ばれていたことがわかる。

今、敦煌出土の吐蕃王朝の『編年紀』(PT. 1288, VP. 750, DTH, pp. 13—27)を見るに、一年毎の事件が春夏秋冬の順で記録されている。春、秋の季節名の示されることは少いが、年の初めに *dp.yid*「春」と示されるのは六七年と七〇四年であるのに対して、年末に「春」とあるのは七〇一年、七〇八年、七二五年、七二六年とあって年末の「春」が、年頭にくる「春」より長かったような確率を示している。これは年末に「孟春」と「仲春」が来て、年頭に「季春」即ち、陰曆四月があったことの確率的な反映と見ることも出来る。

今、Pelliot tib. 1089 の五〇行目⁽¹²⁾以下を見ると、

沙州漢人の役職者を大尚論が(自ら)任命する基本方針に立ち至った時 (*gzhi dang gshugs na*)、勅命通送大臣タクシエル・グーキェンなどからの通達牌 (*phrin byang*) がチョクロ・レクドゥーを通して鼠の年の季春の四日にもたらされたが、それによると、(この)鼠の年の夏、大尚論が国境に出張して、ロンチュ(隴州?)に議会が催される際に、沙州の漢人を二つの(軍)部落に分けて (*rgya sha cu pa sde gnyis bcaid nae*) 役職と役職者 (*las sgo dang dpon sna*) を定めるのであり、命令書には(その際)チベット側から沙州の役職者に任命された者は……

とあり、鼠の年の季春は朔日からその年に含まれていて、《時輪曆》のように十五日から始まるのではないことがわかる。その夏のこととは日時が示されていないので予定であることもはっきりしている。

このように吐蕃の曆が唐の陰曆四月、吐蕃の季春の朔日から始まることを敦煌文献の上でも確認しうる。この事実にもとづいて明確に出来る二、三の事柄を取り上げて見たい。

二 吐蕃曆による年次例の確認

唐から吐蕃王のもとに嫁した文成公主について『通鑑』では貞観十四年（六四〇年）閏十月丙辰の条に「上許^{シヤ}以^テ文成公主^ヲ妻^{ハス}之^ニ」とあるが、一般にはこれを成婚の日とせず、筆者がかねて江夏王道宗の成婚後帰朝報告をした日付と主張している貞観十五年正月丁丑を成婚の時期とみなしている⁽¹³⁾。この見方は、『通典』から両唐書吐蕃伝その他にわたって一様に行われているところにもとづいている。

しかし、前節で吟味したところによれば、この貞観十五年正月丁丑といえどもチベットの曆の *lags blang*「かねのと丑」（六四一年相当）には置き換えられないのである。貞観十五年の三月末日までがチベットではなお「子の年」に当るからである。

吐蕃史料の年次は年名のみによって与えられ、殆どの場合月日までは知ることが出来ない。そこで混乱を避けるために、与えられたチベット曆の年名を便宜上西曆年号に置き換えて示している。この約束に従えば、文成公主の入蔵成婚は六四〇年であって決して六四一年にはならない。従って、敦煌出土の『編年紀』冒頭に示された (D.H. p. 13)¹⁴

王女文成公主は、ガル・トンツェン・ユルスの招きを受けてブー国にお着きになったのである。

に与えられる年次はその後の記述から逆算して如何なるためらもなく「かねのえ子」の六四〇年とされねばならないのである。多くの学者が示すように六四二年にはならない。まして、G・ウライ Day 氏の主張するように六

四二(六四二/六四三)年になることは決してありえないのである。

その上、文成公主が、『通鑑』に示された記述から解釈しうるように六四〇年のうち(閏十月)に入蔵して成婚したことは、『唐蕃会盟碑』東面二二行から二六行目までに証言されている。このことも加えて示して置きたい。訳文は次のようになる。(数字は碑文中の行数)

21、はじめてシナの君主李氏が王位についた後、大唐の治世が「二十」

22、三年目に及び(Don)、王統二代目(一代の後)⁽¹⁶⁾にあって、聖神贊普

23、テイソンツェン⁽¹⁷⁾とシナの君主太宗文武神皇帝の二者が

24、国事を相談して貞観の年に文成公主が

25、贊普に娶られた。

右の文では「貞観の年」が、武徳元年(六一八年)から数えて二十三年目に当り、貞観十四年であることが明示されている。両国の王が直接会ったわけではなく、主たる記述は通婚を示すからである。

次にソンツェン・ガムボ王の死亡年について考察して見よう。

『旧唐書』卷四の高宗紀に

永徽元年五月、吐蕃贊普死。^ス遣^{ハツ}右武衛將軍鮮於匡濟^ツ齋^ツ壘書^ツ往^ツ用祭^ツ。

とあって、佐藤長氏がかねて主張しているように、この時用祭使が派遣されたものと考えられる。今、『通鑑』を見ると、死亡年であるかのように「夏五月壬戌」が与えられているが、正しくない。これは陰曆五月二十四日に相

当する。たとえ、この日に吐蕃から使者が到着したとしても、使者の吐蕃出発は少くとも三か月前に数えられねばならないから、⁽¹⁹⁾陰暦二月末日となり、吐蕃の「孟春」のうちになり、sa no bya「土のと酉」が死亡年になる。表現上の約束によってこれは六四九年と示されねばならないのである。

従って、『編年紀』の六五〇年の条の一つ前に示された⁽²⁰⁾ティソンツェン王の歿年も「酉の年」に当り、六四九年以外になることは決して出来ないのである。

この「土のと酉」の歿年は十四世紀以後の古典史料中でも『赤冊史』の中 (HLD, p. 17a, l. 4) に明確に示されている。これより古いバツバ 'Phags pa の "rGyal rabs" 『王統記』中には (PBG., f. 5b, l. 5) sa pho khyi「土のえ戌」となっているが、me no glang「火のと丑」となれるこの王の生誕年から八十二才目の年を算出したもので問題外とすべきであろう。『王統明示鏡』(GSM, f. 95b, l. 1) では、⁽²¹⁾紛れもなく rGya yig tshang རྒྱལ་ཡིག་མཚན་པོ་
『唐書』吐蕃伝や『通鑑』の唐紀に由来する永徽元年が、西国の暦の年頭の相違を考慮しない、lags pho khyi「かねのえ戌」と訳されて記載されている。これが用祭使派遣の時期であることは右に見たとおりである。『明示鏡』以後六五〇年を取りあげるものの根拠はすべてここに由来している。

従って、佐藤長氏による六四九年歿説を採用しない H. E. リチャードソン氏の主張も根拠を失うのである。⁽²²⁾

今、一つ、この吐蕃の年頭確認で明確になる事実がある。それは嘗て示した⁽²³⁾ことであるが、ティソン・デツェン王 Khri strong lde btsan (742—797) の晩年王妃トナー Bro bza' Jo no btsan khri rgyal no btsan が、未年の冬の仲の月 dgun zla 'bring po རྒྱལ་ཡིག་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ Byang chub rje の法名を

受けた一事である。これは、早くともパー・ラトナが出家した未の年の「孟春」より十二年後になるのである。吐蕃の曆では、「孟春」は同一年の「仲冬」の先に来ることはなく、二か月後にくることと、パー・ラトナが自ら具足戒を受けていなければ他人の出家式の主宰は出来なかつたことを併せて考えれば充分である。

従つて、パー・ラトナを含む「試みの六人」Sad mi mi drug が具足戒を受けた未の年を七七九年とすれば、ドサーの出家した未の年は七九一年となるのである。

三 チベット史料の年次算定法

チベット語史料における年次の算定は、わが国などで行われたのと同じように、*lo ngo*「数え年」⁽²⁴⁾によってなされる。この点は欧米の学者によって必ずしも正確に理解されていない。一口に云うと、ある事件について他の事件との関連を時の長さで示すとき、その時間の関与した初めの年と終りの年をその中間の年に加えて言及するのである。例えば、人の寿命を云うとき、誕生した年と死亡した年を各一年としてその間の年に加算したものを示す。前後の各一年はその時間の長さが問われないのである。

これは、史料に月日が示されず、単に年名のみが与えられていた場合の報告には便利な方法である。しかし、後に数えられる「二年」の時間幅は実際には「二日」から、閏月を挟む場合の「二(大陰)年と二か月」までの大きな開きがある。

すべて、大晦日によって区切られた夫々の名をもつた「年」が年次を計る場合の基本単位として用いられている⁽²⁵⁾

ことに由来している。即ち、大晦日が過ぎれば、事件から「一年が経過した」ことになるのであって、事件から「一（太陰）年」相当の時間の経過を数えて「一年間」が経過したと云うのではないところに注意しなければならない。

「一年が経過した」ことは、「二年目に入っている」ことを云う。この関連は最も重要な概念になっている。従って、序数で示される年数と事件に関して云われる（「数え年」による）年数の長さは一致する。

「大晦日」を境とするために、経過年数を一年後と云っても、「一日」の場合もあれば、閏月の含まれる年が計算される場合では、二年と一か月に一日が欠けたものを指す場合も生ずる点に最も注意しなければならない。

勿論、右の考え方は理論上のことである。今、実例を示すことにしたい。ここでは十二月三十日を大晦日とした場合を取りあげる。今、「子年」の十二月三十日に生れた人間が翌年、即ち、「丑年」の一月一日に死亡したとしよう。このことについて後代の歴史家は、生年として「子年」が、歿年として「丑年」のみが与えられるところから、二日しか生きていなかった人を「二年生きていた」「二才で歿した」と云い、一日後に死んだのを「一年後に歿した」と云わざるを得なくなるのである。

次に、「子年」の一月一日に生れて翌「丑年」の十二月三十日に歿し、その間に閏月が一回あったとしよう。やはり与えられる記録は「子年誕生」「丑年死亡」である。この人間は実質的に満二年（陰曆）と一か月に一日欠けた間を生きていたわけであるのに、「一年後に歿した」と云われる。⁽²⁶⁾これはむしろ、西欧の場合と同じ条件で「二年生きていた」「二才で歿した」と云いうる例である。

実際にこのような場合であれば、「翌日歿した」と示されたり、「丸二年生きていた」と記述されるであろうが、間に何年かの年が挟まれる場合は、右のような事実が多かれ少なかれ前後の各一年の内容として起るのである。また、「一年後」と云う場合は *post. 10* 「翌年」と示されるのが普通である。

チベット文献では、記録のうちに概ね一〇年以内の時の長さが伝えられる場合は、時間としての年の長さが概数で与えられているように思われる。²⁷⁾これは、記録をする人が事実上問題の年の長さを「時間」として大まかに把握出来たことに由来するものと考えられる。例えば「子の年」の十一月から「寅の年」の十月までであったら、ためらうこともなく二年(間)と記録し、「子の年」を一年と数え込まなかったに違いない。このような感覚的な把握ができない長い時間になれば、終期には始期の月名さえ伝わらないこともありえたであろうし、長い年月の場合では、前後の各一年に正確な日時を確かめる意味は薄くなったので先述のような「数え年」方式が生れてきたのであろう。

以下に用語と実例を示して見たい。

例えば、ソンツェン・ガムボ王は五八一年に生れて六四九年に歿した。「かねのと丑」に生れ、「土のと酉」に歿したのである。五八二年から六四八年までの六七年に前後の各一年を加えた六九年が享年と数えられる。この享年はこの王の治世の期間と誤り伝えられたり、その名のソン・デツェンを仲介として、プトンなどによってティソン・デツェン王の享年として誤り伝えられている。²⁸⁾歿したのは生誕の五八一年を第一年とした六九年目である。

年の経過を云う場合の表現は後代の歴史文献に多い。誤りも少くないが、『新赤冊史』から用例を拾って見よう。

de nas lo gsum song ba'i chu 'brug la / (DNMS, f. 72a, l. 6)

それ(一三四九年)から三年が過ぎた水の之辰(一三三五年)に

de nas nyi shu rtsa gcig na 'bri gung thel brab (*ibid.*, f. 65 b, l. 2)

それ(一一五八年)から二年して(一一七九年)ディグン・テル寺が建った。

ここでも「過ぎた」のは大晦日である。大晦日を過ぎると人々は一斉に自らの年齢に一年を加える習慣があったことも記しておかねばならない。右の二例は基準の年を第一年とした場合にそれぞれ「四年目」「二年目」となるのである。例えば、敦煌出土の『編年紀』に六四〇年の公主入蔵を記した後、

de nas lo gyum na / btsan po khri strong rtsan gyi ring la' / (DTH, p. 13)

それ(六四〇年)から三年して贊普ティソツェンの御代に(再びなった時に)

とあるのは、六四〇年を第一年とした場合「四年目」になる六四三年を指して云うのであり、G・ウライ氏のように実際は「二年後」のことであると理解してはならない。そのような解釈をすれば、計算を示す度に一年減って百回計算を試みれば百年少なくなるのである。⁽²⁹⁾

今、第何年目と云う表現をとる場合を示すと、数詞のあとに接尾辞“pa”を用いて序数として

de nas lo bcu dgu pa chu lug la / (DNMS, f. 54a, l. 6)

それ(一三三五年)より一九年目の水のと未(一三三三年)に

とする。これは「一八年して」の意味である。

先に見たように、規準年から大晦日何回経過したかを示すには、年数のあとに直接助辞“*pa*”を置くか、あるいは次のように動詞“*song*”を用いるか、もしくは“*das*”を用いて

chu mo bya nas lo lnga 'das pa'i sa pho phag (DTN, Chapt. Ba, f. 11a, l. 7)

水のと酉から五年が過ぎた土の亥と表わす。

“*yan la*”「まで」を用いた場合、この副詞の意味に迷わされて“*song*”“*das*”「経過した」の意味の動詞を用いながら、到達時点の年まで経過年数のうちに数えこむ場合もあるが誤りである。そのような時には動詞には後に見るような“*gro*”「行く」とか“*lon*”「及ぶ」を用いねばならぬ。

夫々の場合の正しい用例を先ず示して置こう。

de nas deng sang gi sa khyi yan la lo sun brgya dang drug cu 'das so/(DMS, f. 65b, ll. 2—3)

その(一一七八年)のち今日の土のえ戌(一五三八年)まで三六〇年が過ぎたのである。

右は正しく経過年のみを数えている。ただし、到達時点について“*di rdzogs pa yan la*”「(年)が終るまでに」と限定される場合、最後の年の大晦日も含まれるので“*das*”や“*song*”を用いても到達時点を含む年も「経過年」のうちに数えこむことが出来る。例えば、

chu lug de nas me stag 'di rdzogs pa yan la lo brgya dang bzhi song (PKZ, Ka, f. 12a, l. 2)

その水のと未(一三四三年)よりこの火のえ寅(一四四六年)が終るまでに一〇四年が過ぎた。

のよつに示す。今 “rdzogs pa” を合本に準て “di yan la” とした場合、到達時点の年を教へこむには “das” “song” を用ひなごい

de nas deng sang gi rnam 'phyang zhes pa sa pho khyi 'di yan la lo brgya dang laga 'gro/ (DMS, f. 14a, l. 3)

それ(一四三四年)から今日の Vilamba と呼ばれる土のえ戌(一五三八年)まで一〇五年が移り変る。

として “gro” を用ひたり、

de 'i tsho mdo smad du rje rin po che 'khrungs nas bcu gnyis lon/ (*ibid.*, f. 47a, l. 5)

その時(一三六八年)ツォンカバ大師がドメーにお生れになつて(一三五七年)から一二年に及ぶ。

のように “lon” を用ひる。“lon” を用ひて「到達年」を示す例は第一節の『唐蕃会盟碑』からの引用文にも見られた。⁽³⁰⁾

四 誤つた年次計算の諸例

次に、年次計算の誤りの実例を見て、これらを筆者が誤りとする根拠にもなる一節を紹介しながら、幾重にも正誤の確認を試みて置きたい。

『新赤冊史』には

de nas lo bzhi pa shing pho rta la/ (DMS, f. 54a, l. 2)

チムット史料の年次計算法 山口

それ(一二九〇年)から四年目のきのえ年(一二九四年)にとあつたり、さらに、

de nas lo gsum pa shing mo gang la (*ibid.*, f. 54a, l. 5)

それ(一二三二年)から三年目のきのと丑(一二三五年)に

とするが、夫々「五年目」「四年目」とすべきものを共に一年短く数え、あるべき形の「四年して」「三年して」の代りに誤り用いたものである。後の例の場合はすぐそのあとに、先に引用したように、

それ(一二三五年)より一九九年目のみずのと未(一二四三年)に

として正しい形が示されている。誤った云い方は実際より短い期間として示されている。

従つて、はじめから“de nas lo~ra”「それから~年して」の形が用いられる場合にはこの種の誤用はなく、曆学書の計算にもこの形式が多く用いられている⁽³¹⁾。勿論、この表現形式のものについてG・ウライ氏の主張するように修正しなければならない理由は全くない⁽³²⁾。

ウライ氏は右の“de nas lo~ra”「それから~年して」の表現は“de nas lo~pa na (pa—la)”「それから~年目(の——年)に」とあるものと同義であると理解している。ウライ氏は、本論で示したような「数え年」計算の意味を全く理解しないで、単に時間的未満数の年を満数に数える習慣があつたものと独断し、その上に吐蕃時代に基数と序数の区別がなかつたので、基数で示されているものも序数で理解されねばならないと考えたらしい⁽³³⁾。

この見解は全くの誤りである。なる程、接尾辞“pa”を用いて序数を示す形式の取られたのは、訳経時代のある

時期以後であったかも知れない。しかし、基数と序数の区別はそれ以前から存在していた。

今、スタイン文献の、ドウ・ラ・ヴァン・フサン de la Vallée Poussin の目錄び七一〇番とされる『楞伽師資記』のチベット訳文を見ると、後代ならば“gnysis pa”「第一」とするところを“gcig gi 'ogs” (f. 25b, l. 2) としている。「一の後」の意味である。これと全く同じ表現は『唐蕃会盟碑』の東面二二行目にあり、訳文は第一節で示したが、「王統第二代」の意味を“rgyal rabs gcig gi 'og tu”と示している。今日ならば“rgyal rabs gnyis pa la”とびめするであらう。

これと異った形式を示すものとして『字者の宴』に引用されたティンソン・ラツェン王の詔勅がある。その中の崇仏誓約に至る推移を示したもので“dang po”「第一」の語も見えている (KGG, f. 110b, l. 4) が、“gcig tu na”「一番目」，“gnysis su na”「一番目」，“gsum du na”「一番目」(ibid., f. 111a, l. 4; f. 111b, l. 1) の表現が用いられている。夫々“dang por”“gnysis par”“gsum par”などは相訳はない。

この文献について信憑性を云々するならば、代りに同じものを Pelliot tib. 1038 のらびで“gnysis su ni”「第一」(l. 9) “gsum du ni”「第三」(l. 12) の形で見出すことが出来る。夫々“gnysis pa ni”“gsum pa ni”に相当することが明かである。

このように古い史料にも基数と序数の表現上の区別が明確に認められる以上、“de nas lo gsum na”とあるものを“de nas lo gsum pa na”「それから三年目に」の意味に解釈することは許されな⁽³⁷⁾い。今示したばかりの表現を流用してこの意味を示すなら、あるいは“de nas lo gsum du na”とある“de nas gsum du 'i lo na”とびめした

かも知れない。いずれにしても問題の表現は「それから三年して」の意味以外ではありえない。

右の事実は、『編年紀』冒頭の表現に即して見る時極めて明瞭なものになる。第一節に見たように、吐蕃時代の年頭が陰曆四月、吐蕃曆の「季春」であるため、チベットの古代史料では文成公主の入蔵は「かねのえ子」(六四〇年)に、また、ソンツェン・ガムボ王の死は「土と酉」(六四九年)としか記録される筈がないからである。

この限定の中で『編年紀』冒頭の、

de nas lo gsum na

de nas lo drug na'

を読むと、最初の“de”は「子」の年に、二番目の“de”は「卯」の年になり、後者の一句によって指示される年は「酉」となる。従って、右の表現は後代の曆学文献の中で用いられるのと同じ意味を示し、決してウライ氏の云うような序数的表現を代行したものにはならないことが確認される。

右に述べたように「経過年」を示す場合に、“di rdzogs pa yan la”「この年が終るまで」の「終る」を添えないで単に“di yan la”としていながら最後の年を誤って「経過年」として数えこむ例が少くない。これは“di yan la”が“di rdzogs pa yan la”の意味を不注意のまま与えてしまったのかも知れないが、「この年が終るまで」と「この年(のうち)まで」では、「大晦日」が後者には含まれないので意味が全く異ってしまうのである。繰り返すが、後者の表現形式で最後の「到達年」を数えこむ場合は動詞“gro”または“lon”を用いる。この表現は序数

を用いて年次を示す場合に相当している。

今、不注意な表現をしてゐる例を見ると、『新赤冊史』(DMS, f. 42a, l. 5) に

de nas deng sang gi sa khyi 'di yan la lo nyis brgya dang bcu bzhi song/

それ (shing glang 一三二五年) から今日の土の壬戌 (一五三八年) のこれまで二二四年が去った。

とあり、『青冊史』(DTN. Pha, f. 25a, l. 3) に

de nas da Ita 'i me pho spre'u 'di yan la lo bcu bdun song ngo/

それ (leags 'brug 一四六〇年) から只今の火の壬申 (一四七六年) のこれまで二一七年が去った。

とある。グー・ロンマフはこの他でも (*ibid.*, Ca, f. 31a, l. 6)'

me mo bya de nas da Ita 'i me pho spre'u 'di yan la lo drug bcu song/

その火のと酉 (一四一七年) から只今の火の壬申 (一四七六年) のこれまでに六〇年が去った。

と示す。後の例はいかにも誤り易い。年の名のみ見れば、十二支十干の組み合わせを一巡して互に隣り合せている年名だからである。しかし、最後の年の大晦日が終らなければ「六〇年が去った」ことにならないのである。「六〇年になる」とか「六〇年に及ぶ」(gro, lon) としない限り誤りであることに変りはない。

これらの誤った用例を典拠にした謬説が今後も行われぬ為に正誤の区別をはっきりしておかねばならない。

この方面の研究では非常に正確な分析をしているスパンニエン A. Spanien (旧姓マクドナルド) 夫人もシャッキャ
シユリーバドラ Sakyasribhadra の仏滅年代説を取り上げた際にこの誤りを犯している。⁽⁸⁹⁾

即ち、シャキャシュリーが一二〇七年にソルナク・タンポチュ Sol nag thang po che にあって、この年までに仏滅後一七五〇年が過ぎ去ったとみなしているのを取りあげ、これによって仏滅を紀元前五四三年としているからである。⁽³⁷⁾これは、実は、一七五〇年が先の大晦日までに過ぎ去って、今一七五一年目にいるという意味であるから、一二〇七年は一七五一年目に当るわけである。従って、仏滅は紀元前五四四年になる。

「仏滅後一年が過ぎた」と云うのは仏滅後一度大晦日を経過して「第二年目にいる」と云うことになるのである。この点は『白蓮御教』(PKZ, Chapt. Ka, f. 4b, ll. 2—3)に説明されている。

ペンチェン・シャキャシュリーがタンポチュで火のと卯(一二〇七年)に計算したところでは、仏滅からこの年の前年火のえ寅(一二〇六年)の年(が終る)までに一七五〇年が過ぎ去ったのである(song ngo)と示されている。

右の解説で明かなことは、仏滅の月日にかかわりなく、その年の暮までを一年と教え、その後は各年末までを一年として、一二〇六年末までを一七五〇年のうちに数えるが、計数時点の一二〇七年はまだ年末に至っていないので数のうちに入れられていない等の諸点である。

従って、仏滅年次の西暦前の数は

$$1750 - 1206 = 544$$

$$1751 - 1207 = 544$$

と計算される。因みに、紀元前何年に仏滅があったかを知るには、紀元元年と紀元前第一年とが背中合せにあるこ

とを忘れないで、計算時の仏滅紀元からその時点の西紀年数を単純に減ずれば正しい答を得るのである。⁽⁸⁸⁾

この年次計算における誤りは根深く、右に述べた諸点を充分意識して計算に当らなければ危い。たとえば、時輪タントラの最高の学匠であったプトゥンは、曆学についても、当然であるが傑出した存在であったけれども、なおこの誤りを犯しているからである。

これは以前に紹介したところであるが、サキヤ派は一般にソーナム・ツェホ・hSod nams rise mo (1142—82) 以来仏滅紀元を西紀前二二三三年相当としてゐる。『明示鏡』のラマ・ツェン・bla ma dam pa hSod nams rgyal mshan (1312—1375) はそれによるとしながら、帝師タンガー・ロブツァー Kun dga' blo gros (1299—1323) がチベットに帰って具足戒を受けた一三三二年について言及した際、プトゥンの示した計算により、仏滅年を紀元前二二三四年であるとするような計算を行っている。

プトゥンの計算は同じところだつて試みられているが、そのうち初めの二回と最後のものは異っている。大変参考になるので全文を示しておきたい。(SRD, f. 92b, l. 7—f. 93a, l. 3)

thub pa 'brug lo par bzhed pa 'i lugs kyis/rie btsun grags pa rgyal mtshan zhi bar gshegs pa'i chos
'khor me pho byi ba la mdzad pa'i tshe/sa skya pañdias brtsis pas sum stong sum brgya bzhi bcu zhe
dgu lon/de nas me mo glang (92b/93a) la chu mig chos 'khor gyi dus su bla ma chos rgyal gyis brtsis
pas sum stong bzhi brgya dang bcu lon par brtsis pas chu pho khyi lo la bla ma ti shri kun dga' blo
gros rgyal mtshan dpal bzang po bod du bsnyen rdzogs la byon pa'i lo yan chad la sum stong bzhi brgya

Inga bcu rtsa Inga 'das/rtsa drug pa'i steng na yod pas/'bras bu dang sgrub pa 'i dus kyi Inga bryga phrag drug dang/lung mngon pa'i dus kyi bzhi bryga Inga bcu rtsa Inga ni 'das la/lhag mar mngon pa'i lo bzhi bcu zhe Inga/mdo sde 'dul ba rtogs tsam 'dzin pa 'i Inga bryga phrag gsum ste/lo stong Inga bryga bzhi bcu zhe Inga lhag mar lus so zhes bya 'o//

釈迦牟尼が辰年にお生れになったと主張なざる方式に依れば、タクバ・ゲルツェン大師(1147—1216)が亡くなられた時の法会が「火のえ子」(一二一六年)に行われた時、サキャ・パンディタが計算したところによると、(仏滅後三三三九年(目)になる。その後「火のと丑」(一二七七年)にチュミクの法会(が催された)時に法王ラマ(・パクパ)が計算したところによると、三四一〇年(目)になると算出されたので、「水のえ戌」(一三三二年)に帝師クンガー・ロドゥー・ゲルツェン・ベルサンポがチベットで具足戒(を受けるの)に來られた年までに三四五五年が過ぎ去って(三四五)六年目にあつたので、(仏滅後(各三時代から成る)「果」と「成就」の(一)時期、五〇〇年六時代(即ち、三〇〇〇年)と、「教」の時期の「阿毘曇行」時代の四五年が過ぎて、残りは同時代の四五年と、「教」時期の)「経」と「律」の時代及び「しるしだけを保つ」(時代の各)五〇〇年三時代で(都合)一五四五年残っているのであると云われる。

右のうち第一の計算では、仏滅の年が

3349—1216=2133

となり、第二の計算の

3410-1277=2133

と一致する。ところが第三の計算では現在時点は三四五五年でなく、三四五六年であり、

3456-1322=2134

となってしまう。この点はそれに続く、時代区分に基づく計算でも確認され、計算時点が仏滅後三四五六年目にあることがわかる。この計算では仏滅年次が一年古くなって紀元前二一三四年となり、先の二例がサキャ派の伝統どおり二一三三年になっているのと異なる。果して、三四五四年が過ぎて三四五五年にいるとすべきであったのを誤ったのであろうか。あるいは、この第三の計算による仏滅年次が正しかったから、『明示鏡』がその著作時点を示す際にこの数値を用いたのであるかも知れない。

因みに、仏陀が八〇才に歿したとする説をとれば、仏滅年次を紀元前二一三三年（「土のえ子」）とする立場では仏滅年次は「土のと巳」になり、辰年生れにはならない。逆に、第三の計算に従って仏滅年次を紀元前二一三四年（「火のと亥」）とすれば、仏滅年次は「土のえ辰」⁽⁴⁰⁾になり、プトゥンがはじめに示した条件「釈迦牟尼が辰年にお生れになったと主張する方式」に一致するのである。

このように点検すると、むしろ、第一、第二の計算はプトゥンが不用意にサキャ派の誤った計算を踏襲してしまったものと云わねばならない。いうまでもなく、ソーナム・ツェモの計算は仏誕を辰年とする立場からは誤って一年新しく数えられているとされねばならないのである。

プトゥンは右の部分に続いて、カシュミール・パンディタによる紀元についても、先に見たような後代の『白蓮

御教』と解説されるのと同様の正解な報告をしてゐるので、右の三つの計算のうち最後の説をブタツンの本来の主張として採らばよい。

参考文献

- DMS bSod nams grags pa : *Deb ther dinar po 'i deb gsar ma*, 1538, Ms. 103 fols., (G. Tucci : *Deb ther dinar po gsar ma*, Roma 1971).
- DTH J. Baccot, F. W. Thomas, Ch. Toussaint : *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris 1946.
- DTN gZhon nu dpal : *Deb ther sngon po*, 1476, Ed. Kun bde gling.
- HLD Kun dga' rdo rje : *Hu lan deb ther*, 1346, Ed. Gangtok 1961, 40 fols.
- GSM bSod nams rgyal mshan : *rGyal rabs rnam s ky'i 'byung tshul gsal ba 'i me long chos 'byung*, 1368, Ed. sDe dge, 104 fols.
- IC. II L. Renou, J. Filliozat : *l'Inde classique*, II, Hanoi 1953.
- LSB kLong rdol bla ma : *kLong rdol bla ma'i gsung 'bum*, (1800) Chapt. Ma. bzo dang gso ba skar rsis rnam las byung ba'i ming gi grangs. Ed. Peking, 22 fols.
- NLO G. Uray : The narrative of legislation and organization of the *mhas pa'i dga' ston*, *Acta Orientalia*, XXXVI, 1912, pp. 11—68.
- PBG 'Phags pa : *Bod kyi rgyal rabs*, 1275, Ed. sDe dge (Sa skya bka' 'bum, Vol. Ba, ff. 360a—361b)
- PKZ lHun grub rgya msho : *Pad ma dkar po'i zkal gyi lung*, Vol. Ka, 1447, Ed. Zhol, 245 fols.
- SRD Bu ston Rin chen 'grub : *Chos 'byung gsung rabs rin po che'i mdzod*, 1322, Ed. Zhol, 212 fols.
- 『古チ研』 佐藤長『古代チベット史研究』上・下 京都一九五八、一九五九年。
- 「古チ考」 山口瑞鳳『古代チベット史考』上・下 『東洋学報』四六—三三『四』一—九六頁。
- 『古チ抄』 Ngag dbang blo bzang rgya msho, *Du ka la'i gos bzang*, Vol. Ka, 364 fols.
- 「チ曆学」 山口瑞鳳『チベットの曆学』『鈴木学術財団研

究年報』一〇、一九七三年、七七—一九四頁。

『ヤンチン三社誌』 Jam dbyangs bzhad pa dKon mchog 'jigs med dbang po 'i sde : *blo bzang dpul lan ye shes kyi rnam thar nyi ma'i 'od zer*, 1786, Ed. bkra shis lhun po, 375 + 305 fols.

註

- (1) 「不知節候、麥熟為歲首」(『旧唐書』吐蕃伝)「其四時以麥熟為歲首」(『唐書』吐蕃伝)。
- (2) 王忠「吐蕃伝箋証」北京、一九五八年、一六頁。
- (3) 拙論「チ曆学」七九—八一頁参照。
- (4) 前掲拙論七九頁、LSB, f. 18b, l. 1. 参照。
- (5) LSB, f. 17b, l. 4; f. 18a, l. 7—18b, l. 1. 月の名称 *ཇུ་འབྲུག་པུ་ཆེན་པོ་* f. 17b, ll. 4—6 及び *ཇུ་འབྲུག་པུ་ཆེན་པོ་* f. 21a の表参照。
- (6) 薛仲三「歐陽頤編『兩千年中西曆对照表』」IC, II, pp. 732—733参照。 *Mahavyutpati* (四訳対校『翻訳名義大集』) *ཇུ་འབྲུག་པུ་ཆེན་པོ་* 8272 : *māgha dgun zla tha cung mchu* 即ち、季冬 *mchu zla* となつてゐる。漢訳語として示される「季冬」はチベット語の訳であつて、*māgha* の月が漢土の季冬に当るといふのではない。同書中のその他の月名の訳も同様に理解されなければならない。
- (7) 略号表参照。前掲拙論、九二頁注3参照。

チベット史料の年次計算法 山口

(8) IC, II, pp. 721—722, 732—733 cho 'phrul 月の朔日が大陽曆一月後半のうちにあつたことを言う。

(9) 孟春一日はほゞ大陽曆三月十三日であり、頗勤具那月 *ཇུ་འབྲུག་པུ་ཆེན་པོ་* *Mahavyutpati* *ཇུ་འབྲུག་པུ་ཆེན་པོ་* 8261 : *phalgunah : dpyid zla ra ba gre can nyid* gre can 「張宿」は dho can 「翼宿」と同義であらう。この陰曆二月に入つて間もなく月は *caitra* 制恒羅月を構成する「角宿」に移る。従つて、次の朔日から始る月は制恒羅月と呼ばれてよいのである。閏月を置いた翌月から数えて三二・五か月を経ると(ただし、時輪曆の計算法)、次の朔日から始る月も当月と同じ名で呼ばれなくてはならなくなる。つまり、月が新しい星宿群に移る日時が次第に遅れて、月末に移行するため、翌月の朔日ばかりでなく、翌翌月の朔日まで同じ星宿群に留るため、翌月が続いて同じ名で呼ばればならぬのである。

- (10) 「チ曆学」七九頁b、九〇頁a、注6。
- (11) 蔡邕月令章句曰、百穀各以其初生為春、熟為秋。故麦以孟夏為秋、(『初学記』歳時部上)。以三春日至始、數、九十二日謂之夏至、而麦熟、(管子「輕重」)。後者の場合は夏至には麦が熟していると述べたに留る。
- (12) M. Lalou : *Revendications des fonctionnaires du Grang Tibet au VIII^e siècle.* (*Journal asiatique*, 1955,

- pp. 171—212), pp. 178, 183 参照。訳文修正の試みについでには拙論「沙州漢人による吐蕃二軍団の成立と mkhar tsan 軍団の位置」(『東京大学文学部文化交流研究施設研究記要』四、一九八一年、一三—四七頁)二九頁参照。本論では訳文を更に改めている。
- (13) 拙論「古チ考」(下)、四九頁、八四頁注九七、八七頁注一〇四参照。
- (14) 少なからぬ数の学者がこの年についてのみ正確に西暦に換算した年次を取り上げようとする。しかし、他に与えられる諸年次について月の名まで確かめうるものは殆どないからこの試みには賛成出来ない。
- (15) NLO, pp. 35—35; L'annalistique et la pratique bureaucratique au Tibet ancien (*Journal asiatique*, 1975, pp. 157—170) p. 161: The annals of the 'A za principality (*Proceedings of the Coma de Körös Memorial Symposium*, Budapest 1978, pp. 541—578) p. 564.
- (16) この部分の訳文は拙論「古チ考」(上)、六頁でも誤訳を示した。H.E. Richardson: *Ancient historical edicts at Lhasa and*, London 1952, p. 60. 『古チ研』(上)、二二頁(下)、九二四頁のいずれにも正訳は示されていない。示されたこの時期は太宗代の貞観一四年に当り、実際は「貞観の年に文成公主が贊普に娶られた」を修飾する。
- 「時」の副詞節と副詞句、それに長い副詞節が上に重ったものになっている。被修飾文中の時の副詞「貞観の年」は、先立つ副詞節、副詞句の「時」と同一のものを分けて表現したものであり、この時代の文章に屢々用いられる併行文による分割表現の一例である。簡単なものでは、例えは 'yul byung sa dod tshun cad (F.W. Thomas: *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*, II, London 1951, p. 93) 「国土が出現して以来」がある。この“yul”と“sa”及び“byung”と“dod”は夫々同義であり、分割して繰り返し表現されている。
- (17) ソンツェン・ガムポはティソンツェンの美称である。DTH, p. 118, II, 23—24. 参照。
- (18) 『古チ研』(上)二〇九—二一一頁、高宗紀の記事も唐側の事件に日時を与えて示したもので、贊普の死はその因として示されているのに過ぎない。
- (19) 唐代の唐と吐蕃との交通事情を示すものとしては鄯城から中央チベットまでの道順を示すものしか知られていない。この道順は後代のダライ・ラマ五世やメンチュン・ラマ三世が北京に赴いた折のそれらと大略一致している。この点は佐藤長氏の研究(『チベット歴史地理研究』東京一九七八年、五一—六二頁)に詳しい。今、ダライ・ラマ

五世の場合を見ると、往路は途中の滞留が長く、四月二日に *Bsam grub bde chen* を出発して青海のクンブム *sKu 'bun* にてくまびつに約四か月足らずを要している。『五世伝』 Vol. Ka, f. 175b, 1. 6—f. 188a, 1. 2) が、帰途はクンレン *dGon lung* を七月一日に出て一〇月八日の夕刻ラデン *Rva sgreng* に着いている。その間、一か所に二泊以上した場合の余分の日数を除くと約七五日を要したことになる (f. 213b, 1. 3—f. 217b, 1. 3)。これをベンチェン・ラマ三世の場合で見ると、七月六日ラデンの近くでダライ・ラマ八世の見送りを受けて出発し、十月十五日にクンブムに着くまで三か月と十日を要しているが、途中の布教活動で余分に要した日数を除くと七四日になる (『ベンチェン三世伝』 f. 70b, 1. 2—f. 93b, 1. 1)。次に青海のグンレンやクンブムの二大寺から長安に至る日程はダライ・ラマやベンチェン・ラマなどの旅程からは直接知られないが、これら二大寺から蘭州を経て長安に至る距離と、蘭州を経て寧夏に至り、黄河を渡ってオルドスのオルンプラク *O lon pu lag* (= *ulaian bulay*) に到達する里程とでは後者がやや長くであろうと考えられる。そこで、ダライ・ラマによる旅程の方を観察して見よう。往路のダライ・ラマ五世は八月二日にクンブムを発つたのち、寧夏(銀川)を通過して九月二十一日に黄河の渡しを渡り、十

月三日にオルンプラクについている (『五世伝』 f. 188a, 1. 5—f. 192b, 1. 1)。帰途のダライ・ラマ五世は六月一日にこの地に至り、七日に黄河を渡り、二四日に蘭州を経て六月三〇日にクンレン寺に着くことになる (f. 212b, 1. 4—f. 213b, 1. 2)。この間は三〇日である。往路の場合は途中の滞留が一二日余分にあるので、やはり三〇日かかったことになる。上に見たところは貴人の旅程であって使節のそれではない。しかし、贊普の死を伝えた使節も特に旅を急いだわけではないから、三か月半はかからなかったとしても、三か月は必要であったと考えられる。なお、唐代と清代の交通事情は格別の相違があったと見なければならぬ理由はない。右に見たオルンプラクは、寧夏から帰化城に向う場合に二回渡る黄河の両方の渡し場の中間に位置していた土地と考えられる。清代のラサ・北京間の使者は概ね三か月から五か月を旅に費していた。この点は実録とダライ・ラマ五世伝との照合で知られる。ペテック氏の研究ではカンチェンネー *Khang chen nas* の死は一月後に北京に伝えられたと云われている (『*China and Tibet in the early 18th century*, Leiden 1950, pp. 101, 104) が、これは特例とされるべきであろう。

(20) 『編年紀』六五〇年相当の条に示されていない以上、ソソン・ガムボ王の死を少くとも六五〇年とするもの

ではない。六四九年以前を当てるのが当然である。

(21) GSNI, f. 95a, l. 4. 稻葉正就・佐藤長『フウランテプ
テル』京都、一九六四年、一一—一四頁参照。

(22) H. E. Richardson: How old was Strong hsan sgam
po? (*Bulletin of Tibetology, Gangtok, II—1, pp. 5—*
8). p. 5. リチャード・スン氏は吐蕃暦の年頭を考えていない
のは勿論、漢文史料の与える日付けの性格を知らず、佐藤
氏の主張を理解していない。その上、注(20)に示した事実
を意識していない。

(23) 拙論「rin lugs rBa dPal dbyangs」(『仏教における
法の研究』東京、一九七五年、六四—一六六頁) 六五
〇—六五三頁参照。

(24) "lo ngo" の "ngo" は「顔つき」「しるし」の意味で
ある。十二支の年名によって指定され、相違が区別される
だけの「年」であって、十二か月の時間を問題にしていな
い。

(25) 一年以下の時間が問題になっていないことを意味す
る。即ち、"lo ngo" (注(24)参照) による計算である。

(26) G・ウライ氏は前半の例のみを考えて後半の例には思
いが至らなかつたというのではなく、吐蕃王朝時代のチベ
ット人は序数と基数の区別がなかつたから、基数で示され
た年数も序数で示されたものと理解すべきであると考えた

ものらしい。それでは、後代の史料に同様の表現で見える
年数をどのように扱うべきかも考えられねばならない筈で
あるが、序数表現が確立されたと同氏によってみなされて
いる時代の史料についての扱いは別に示されていない
(NIO, pp. 34—35)。仮にウライ氏の云うように序数表
現ですべてが理解されるべきであつたとしても、例えば、
「それから二年目に」と理解されるものについても、年末
から数えて一年未満のものもあれば、年頭から数えて翌年
の年末までを対象とし、間に閏月を挟んだ二年以上の実質
をもつものもあることを知らねばならない。

(27) 『編年紀』六四九年相当の条にソンツェン・カムボ王
と文成公主の結婚生活は「三年」であつたと示される
(DTH, p. 13) のも六四六—六四九年を内容としている。
後代の伝承でも、クンソン・クンツェン王の在位年として
示される五年は六三八—六四三年を指したと考えられる。

(28) 「古チ考」五二—五七頁。

(29) 後述のように吐蕃時代にも基数と序数の示し方に区別
があつた。従つて、古典時代と吐蕃時代の同形式の年次表
現はそれぞれ同じ意味に理解されねばならない。例えば、
『新赤冊史』の基数用例にウライ氏の解釈を敢えて適用す
れば一回計算する毎に一年の誤差を生ずるのである。

(30) 本文一四六頁。

(31) Bu ston Rin chen grub: *dPal dus kyi 'khor lo'i rtsis kyi bstan bcos mkhas pa rnamis dga' bar byed pa*, 1326, Ed. Zhöl, 122 fols., ff. 84a—85a, PKZ, ff. 11a—18b.

(32) 注(26)・(29)及び本文後段参照。

(33) NLO, p. 34 以下 “But in Tibet «current years» are in use i.e. each calendar year, even if not full, is regarded as a complete year.” とされているが、満・未満年の時間が問題ではなく、大晦日毎に異なる名を持つ年の数が扱われるところに問題があるのである。

(34) Pelliot tib. 16, f. 71b, l. 3 を見るに “de nas lo bcu gnyis ‘das te lo bcu gsum la bab pa dang.” 「それから一二年が過ぎて十三年目に至った時」とある。この文の後半を「十三年目が至った時」と訳して “lo bcu gsum la” を “lo bcu gsum pa” となる前の形と見てもよい。いずれにしても、この前半の文章に示されている基数を、ウライ氏の主張のように序数に理解して、実質「一年が過ぎて十二年目になった」と読むべきであろうか。これは大晦日を十二回経過して十三番目の年になったことを云うのであり、経過した一二年のうちの第一年は一日の場合もあれば、十三か月に一日欠ける場合もあるのでウライ氏の解釈は適用出来ない。一二の数は基数であり、十三の数は

序数相当の内容である。従って、年に関する基数をすべて序数相当のものに読みかえると云う主張も通用しないことがわかる。右の表現形式は、本文後段に見るように後代の文献にも屢々現れる。なお、同じ Pelliot tib. 16, f. 72a, ll. 14, に *pa* を伴った序数詞が用いられている。“*phas pham pa bzhi dang po*” “*phas pham pa*……*gnyis pa*” “四波羅夷法の第一” “第二波羅夷法” などをあげる。これは、経などの訳語として用いられたものの、一般的用法にまで接尾辞 “*pa*” による序数表現が発展していなかったことを示す一例であろう。

(35) ウライ氏の解釈では文成公主が六四二年にブーの国に到着したことになる。これについてのウライ氏の説明は吐蕃暦の年頭などはもとより考慮がなく、文成公主が六四一年に出発して東北チベットに一年滞留したものとして辻褃を合せている。しかし、東北チベットが「ブー国」でなかったとする考証を示されていない。(NLO, pp. 34—35)。

(36) A Macdonald: *Preambule à la lecture d'un rGya bod yig tshang*, (*Journal Asiatique* 1963, pp. 53—159) p. 167。

(37) 拙論『諸王統史明示鏡』の著者と成立年』(『東洋学報』六〇—一・二、一—一八頁) 一七頁、注(31)参照。

(38) この点については前掲拙論一二頁や拙論『七世紀前半

の吐蕃とネパールの関係」、『文化交流研究施設研究紀要』二・三、東京大学文学部、一九七八年、二九―五七頁）三七頁に示した。後者の記述中にソーマム・ツェモの計算の方が誤っていることを見落している。

(39) 注(38)参照。

(40) ソーマム・ツェモがこの「土の辰」の年 (*Sod namas rtsa mo 'i bka' 'bum*, Vol. Nga, f. 315b, l. 5) を「金の辰」の年としているかのように誤った訳文を前掲拙論

(注(38)に示した第二の論文) 三七頁に示したが、訂正しておきたい。

(41) プトゥンはシャキャシュリーバドラの主張する仏滅年次(五四四年)を用いても第三の計算法を展開して、一三二二年が仏滅後一八六五年を過ぎて六六日目であると示している (SRD, f. 93a, ll. 3-6)。

【補註】 註(11)参照。